第１部会

未来社会における道徳教育の意義と役割

企画者：平　真由子（金沢工業大学）
司会者：平　真由子（金沢工業大学）
報告者：渡邉　真魚（日本大学）
　　：日向　正志（金沢工業大学）
　　：白木　みどり（金沢工業大学）
　　：林　泰成（上越教育大学）

【企画趣旨】

IT 技術や AI の進展により、教育の可能性はこれまでにないほど広がっている。一方で、価値観の多様化や AI 技術の発展に伴う新たな倫理的課題など、新たな道徳的な課題と向き合う必要も出てきている。社会の変化を踏まえ、道徳教育についても改めてその在り方を考えていく必要がある。そこで、本ラウンドテーブルでは、未来の学校教育における道徳教育の意義や役割について、4 名の報告者の話題をもとに議論を深める。その後、参加者とともに意見を交わしながら、これからの社会において道徳教育はどのようにあるべきか、多角的かつ実践的な視点から考えていく。

【報告記録】

本ラウンドテーブルでは、4 名の登壇者がそれぞれ異なる視点から未来社会と道徳教育の関係について報告を行った。

最初に、日本大学の渡邉真魚先生から「道徳教育×防災教育」をテーマに報告がなされた。福島県の中学校における防災教育と道徳教育の実践が紹介され、特に生成 AI などの新たな技術と向き合いながら、正解のない問題にどう向き合っていくかという道徳的思考の重要性が指摘された。災害時に情報をどう扱うかという視点から、フェイク画像やデマの拡散に対して、子どもたちが道徳的に判断し行動できる力を育む取り組みが報告された。また、震災の記憶を持たない子どもたちに対しては、道徳教材やロールプレイ、他者の体験の共有を通じて、命や生きることの意味に触れさせる授業の工夫がなされていた。こうした学びの中で、子どもたちは「命や安心の大切さ」について考え、正解のない問いに対して自ら意味づけや価値づけを行う道徳的思考を深めていくことの重要性が強調された。

続いて、金沢工業大学の日向正志先生は「道徳教育×地域連携」という視点から報告を行った。地域コミュニティの希薄化が進む中、石川県の小学校におけるコミュニティ・スクールの取り組みを紹介し、地域課題に子どもたちが主体的に関わる姿が描かれた。たとえば空き家を地域カフェとして再生するプロジェクトでは、地域住民と協働しながら社会参加の力を育む教育の可能性が示された。一方で、こうした活動の中に道徳教育の意義が認識されにくいという課題も浮かび上がった。日向先生は、道徳教育の価値を地域住民に丁寧に伝え、カリキュラム・マネジメントにおいて道徳教育を軸とした設計が求められると提言した。

3 人目の報告者である金沢工業大学の白木みどり先生は、「道徳教育×エウダイモニア（善き生）」というテーマで発表した。社会の形成主体が減少し、他者や社会への関心が希薄化する中で、自己実現や充実感といった内的価値に基づく幸福＝エウダイモニアの重要性を説いた。白木先生は、エウダイモニアは数値化が困難な概念であるが、思考力の育成や自己

理解の深化を通じて、子どもたちが自らの人生に意味や価値を見出す教育が必要だと述べた。道徳科はそのための「意味づけの場」「意思決定の理由を共有する場」として再定義されるべきだと提起した。

最後に、上越教育大学の林泰成先生が「道徳教育×個人と社会」をテーマに報告した。情報化や格差の拡大、不確実な国際情勢などを背景に、未来社会がディストピア化する可能性を指摘し、従来の「個人の道徳性」に偏重した教育から、「社会の一員としての責任」や「公共性の涵養」にも目を向けるべきとした。道徳教育が個人の成長だけでなく、持続可能な社会の構築に寄与する教育として再構築される必要があると訴えた。

4 名の報告はいずれも、道徳教育をこれまでの価値観の枠にとどめず、より社会的・倫理的な課題に向き合う教育へと変容させるための視座を提示していた。報告全体を通して、道徳教育の新たな可能性が多角的に描き出された。

【議論の記録】

議論は、司会者が報告者 4 名に共通するキーワード「共助」「協調」「協力」「共感」と道徳教育との関係について問いかけたクロストークから始まった。これまで日本社会のコミュニティの中で培われてきた精神性が、現代では希薄化している。だからこそ、「共助」や「協力」を支える道徳性を、道徳科の授業で育む必要があるのではないかという意見が共有された。

その後のフロアとの議論では、道徳教育の今後のあり方について多角的な視点から意見が交わされ、学校教育全体へと議論が広がった。特に印象的だったのは、「未来へのネガティブな見方を生み出しているのは大人側ではないか」「子どもに希望をもたせるには、大人がよりよい社会を創っていこうとする姿勢を見せるべきではないか」といった声である。道徳教育は個人の内面を育むだけでなく、社会を共につくる姿勢を育てる役割を持つべきだという問題意識が共有された。また、不登校生徒への対応では、個人の思いの尊重と、社会の一員としての役割を育てる視点のジレンマが指摘された。特定の価値観を押しつけず、個が社会との接点を自ら見出せるような学びが求められるとの意見もあった。「仲間と関わる時間の確保が道徳教育を豊かにする」「安心して人とつながれる環境があってこそ、価値観を育てる学びが成立する」といった声もあがり、子ども同士の関係性の中で深まる道徳的思考の重要性が再確認された。こうした対話を通じて、形式的な授業だけでは育ちにくい価値の獲得を、日常の人間関係や共同的な体験の中に見出すべきであるという方向性が共有された。地域社会との接続についても、「道徳教育を学校の中だけで完結させず、地域や社会とつながるかたちで再構築すべきではないか」という視点が複数から提示された。地域の人と協働して実社会の課題に向き合うようなフィールドワークや実践的な学びを通して、価値観の多様性や共生の意識を育むことへの期待が寄せられた。さらに、未来に対して希望を持つ力や、社会に参画しようとする意識を育てるには、知識や情報の伝達にとどまらず、「自分も社会の担い手である」という実感を持てる教育環境が必要であるという指摘もあった。そのため、道徳教育においても、社会課題を扱うことや、子ども自身の経験や気づきを起点にした対話をより一層取り入れていく意義についても議論が及んだ。

議論全体を通じて、「個人と社会」といったキーワードが繰り返し浮かび上がり、道徳教育の役割は個の内面にとどまらず、社会と向き合う力を育む教育として再定義されつつあることが確認された。

第２部会

日本型ウェルビーイングと道徳教育

企画者：髙橋史朗（麗澤大学）
司会者：山﨑敏哉（世田谷区立山崎小学校）
報告者：髙橋史朗（麗澤大学）
：早田保美（川崎市立栗木台小学校）
：上澤篤司（江東区立大島南央小学校）
：萩原ゆかり（さいたま市立辻小学校）
：及川直人（八街市立朝陽小学校）
指定討論者：石田祐一郎（人材育成コンサルタント）
寺澤玲子（認定産後ドゥーラ）
江崎圭伊子（川崎市立小杉小学校）

【企画趣旨】

OECD の子供のウェルビーイング指標には、①困難に直面した時、解決策を見つけることができる②人生に明確な意義や目的（将来の夢や目標）がある等があり、PISA2022 調査結果によれば、日本の子供はすべて最低であるが、これと全く対照的なのが大谷選手の大活躍で、彼が高一の時に書いた「目標達成シート」を日本型ウェルビーイングの視点から分析すると、最も注目されるのは、目標を「他者との関わり」の視点で設定していることである。

まず①に関連して、「ピンチに強い」「一喜一憂しない」「雰囲気に流されない」と書いている。②については、「はっきりとした目標、目的を持つ」と明記している。また、「他者とのかかわり」の視点から見ると、「思いやり」「仲間を思いやる心」「愛される人間」「信頼される人間」「応援される人間」「審判への態度」などが注目される。

これを第４期教育振興計画の２本柱である①持続可能な社会の創り手の育成②日本社会に根差したウェルビーイングの向上から捉え直し、持続可能性を「常若（とこわか）」と捉える「常若産業甲子園」の授業実践と、感知融合の道徳教育を「感じる」「気づく」「見つめる」「深める」「対話する」「協働し働きかける」の６つの視点から授業実践に取り組んだ。

【報告記録】

冒頭に、司会の山﨑会員よりこれまでの積み重ねてきた３回の共同研究発表の概要とラウンドテーブルの概要について説明があった。前半に企画者兼報告者である髙橋会員より、理論的課題について報告をした。その後、報告者４名からの理論に基づく実践発表を行った。以下、報告者４名の発表の記録である。

＜報告１＞

早田保美「日本型ウェルビーイングと大谷翔平の目標達成シート」

児童の大半は、大谷選手の強さの土台となったものとは、技術の向上だけでなく「あいさつ」「ゴミ拾い」などの他者とのかかわりを軸に心を磨いてきたことに気づく。夢を実現するために大切な心とは何かを見つめ目標達成シートを作成し、対話を通して深め、協働的にはたらきかける活動を取り入れつつ道徳的実践意欲や態度につながるように試みた。

＜報告２＞
上澤篤司「日本型ウェルビーイング教育をどう教室に生かすか」
　なぜ日本の子供たちの自己有用感が低いのか。根底には本人たちも気付かない寂しさがあるのではないかとした仮説を立て、実践している教師との関係、児童同士の関係、親子関係を繋ぐ手立てを工夫し、「他者との関わり」をキーワードにした教室の日常、道徳授業実践を報告した。
＜報告３＞
萩原ゆかり「『感知融合の道徳教育』６つの視点で展開する授業実践」
　感性と知性を融合し、さらに身体へのアプローチを加えた道徳授業を展開することで児童の主体的な変容を図った。授業作りの視点は「①感じる②気付く③見つめる④深める⑤対話する⑥協力し働きかける」の６つである。道徳の授業を核に、学活、総合などの教科や学校生活全般、家庭生活の中で学びをいかし深めていった子どもたちの様子を報告した。
＜報告４＞
及川直人「Sustainability を『持続可能』から『常若』として捉える、道徳教育実践」
　総合的な学習の時間を中心に、社会貢献を視点としたプロジェクト型学習に取り組んだ。「常若」の実践や教科横断的に実施した単元内容と共に、子供達自身で作成した常若産業甲子園の動画についても報告した。

【議論の記録】
　後半は、実践に発表に対して、指定討論者３名がコメントをした。以下、議論の記録である。
＜指定討論１＞
石田祐一郎（人材育成コンサルタント）「企業教育の視点から」
　企業における道徳教育の重要性を論じ、人権・SDGs・ウェルビーイングへの対応や人的資本経営、働き方改革の必要性を指摘した。法令遵守を超えたモラル意識の向上、日本型ウェルビーイング実現のために、小学校で実践している活動を企業研修に落とし込むことが必要で、「感じる」という非認知能力の向上が最も大事なマネジメントだと提案した。
＜指定討論２＞
寺澤玲子（認定産後ドゥーラ）「家庭教育の視点から」
　出産後の家庭を支援する立場から、核家族化や母親の早期復職で家庭に余裕がなくなる現状を報告した。笑顔の連鎖が子どもの安心を生むと述べ、感じる・気づく・対話する時間と環境の重要性を強調した。地域貢献活動に親を巻き込み、家庭や地域における協働的な学びを広げることが課題と指摘した。母子の心豊かな関係づくりを支援し、道徳教育の根を家庭から育む役割を担っていきたいとコメントした。
＜指定討論３＞
江崎圭伊子（川崎市立小杉小学校）「学校教育の視点から」
　「上すべりでない道徳教育を生み出すために」というテーマで、それぞれの実践発表についてコメントした。必然性ある問いや対話を通じ、価値を主体的に選ぶ子どもの姿や、道徳的実践意欲の高まりについて言及した。今後も「感知融合の道徳教育」を軸に実践を深化させたいとまとめた。

第３部会

道徳科の多様な授業展開の可能性を探る
― 次世代育成型研究プロジェクト（方法部会）からの提案：その２ ―

企画者：荒木寿友（立命館大学）
司会者：荒木寿友（立命館大学）
報告者：阪本 景子（愛知県東海市立名和中学校）
：山田 将之（盛岡市立上田中学校）
：由良 健一（奈良女子大学附属小学校）
：吉野 剛史（横浜市立東台小学校）

【企画趣旨】

本ラウンドテーブルは、2023 年度からスタートした次世代育成型研究プロジェクト・方法部会のメンバーによるものである。道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議は、質の高い多様な指導法として「自我関与が中心の学習」「問題解決的な学習」「体験的な学習」という３つの指導方法を提示したが、その趣旨は児童生徒が主体的に道徳の問題に向き合い、多面的・多角的に考え、他者と積極的に話し合う授業スタイルを求めるものであった。本方法部会では 2024 年の第 104 回大会において、広義の教育方法の観点、すなわち「カリキュラム構成」の観点から道徳科の授業のあり方について多面的に考察を行った。
今回の提案では狭義の教育方法、つまり「指導法」「授業づくり」の観点から道徳科の授業について考察を行いたいと考えている。４名の方法部会のメンバーより話題提供をした後に、参加者の皆さまと論議を重ねたい。

【報告記録】

＜阪本景子＞

本研究は、成功や出来上がった姿だけを重視する風潮の中で、PERMA 理論に基づく道徳授業を通して、生徒たちのウェルビーイング、多面的な幸福観や内面的充実感の形成を目指した実践である。授業では、「意味」「良好な人間関係」「ポジティブ感情」などに着目し、議論を重ねることを通じて、自己の充実や他者とのつながりに価値を見出す姿が明確に確認できた。結果だけにとらわれず、自分なりの幸せを見つめ直し、内面的な動機づけを育む重要な契機となったことから、道徳科にはウェルビーイングを多面的かつ主体的に捉え直す可能性と教育的意義があることが示唆された。今後の教育実践においても、この視点を取り入れることが持続的な幸福感の醸成に寄与すると強く期待される。さらに、多様な価値観を生かしながら意見を交換し、議論を深める活動も積極的に行われた点が特徴的である。

＜山田将之＞

本提案では、道徳科における知識の概念的理解について検討し、それに基づいた授業実践の考察について述べた。道徳科における「知識」の議論は、最近議論が活発になってきたが、いまだ詳細に規定されていない。しかしながら、次期学習指導要領の議論においては、「中核的な概念」を中心とした目標や内容の整理が進められ、道徳科も今後検討が必要である。道徳科における「知識」、さらにはその知識の概念的理解について踏まえた授業実践が求められているといえよう。本提案においては、学習指導要領解説の文言や先哲の思想といった抽象的な概念を用いて、その具体を考えたり、具体から再度抽象化するなどして、その道徳的原理を見いだそうとする実践を開発し、紹介した。まだ、吟味の必要な部分が多いため、今後は参会者から寄せられたご指摘について丁寧に考察を加えていきたい。

＜由良健一＞

本研究は、道徳科授業に「おたずね」（友達の発言に対し素朴な疑問や違和感をもとに問う）を導入することで、対話が多面的・多角的になる可能性を検証したものである。教材「うばわれた自由」を用い、同学年・同一教材で「おたずね」の有無による比較を行った結果、「おたずね」ありの授業では「自由」「協和世界」「責任」など価値の捉え方が広がり、「おたずね」の授業を継続したクラスでは、「たとえば？」というおたずねによって自己の生き方を見つめる契機となった。教師の発問のみで進める授業より、子どもの「おたずね」のある授業は対話が広がり、道徳的価値について多面的・多角的に考えることができた。また、「おたずね」は道徳的価値の理解がある程度深まった段階で質の高いものが生まれることから、教師の発問を踏まえた上での「おたずね」がより効果的である。今後は、「おたずね」が生まれるプロセスや授業設計を明確にしていくことが課題である。

＜吉野剛史＞

特別支援学級の児童在籍数は年々増加傾向にある。学習の躓きの一つに言語能力の未発達から起こる教材理解の不十分さがあるため、小学校１年生と６年生を対象に、第１教材と第３５教材（１年生は第３４教材）の文字数をカウントし、おおよその範読時間を示した。最長で範読に９分を超える教材も存在したため、文字を使用せずに写真のみを用いた視覚効果型の教材を提案した。子供の発話記録から計量テキストデータで授業の全体像を明らかにするとともに、個々の思考の流れに注目すると道徳性に係る発話も確認ができたことから、教材として効果が認められた。特別支援学級における道徳科の授業では、通常の教科書教材の使用が困難であり、子供も教師も困り感を抱いていることが多い。したがって道徳科においても、所謂☆本の作成が求められることを提言した。質疑では、拡大教科書がまだ十分に認知されておらず、生かしきれていないという制度的な課題も指摘された。

【議論の記録】

質疑応答では、各発表の具体的な授業プロセスや理論的背景、教材のあり方など、多角的な議論が展開された。由良会員の「おたずね」を取り入れた授業については、児童の発言を板書でどう共有し、議論を深めていくかという具体的なプロセスに質問が集中した。また、阪本会員の PERMA 理論を応用した実践では、理論の 5 つの視点を授業内でどう機能させ、生徒の思考を促すかという授業設計の詳細が問われた。山田会員の実践では、提示された理論的枠組みと生徒の思考の往還がどう結びつくのかについて活発な意見交換が行われた。さらに、吉野会員の実践をきっかけに、特別支援教育の視点から議論が発展した。文字情報を排した教材の有効性が確認される一方、既存のデジタル教科書の音声読み上げ機能や、文部科学省が用意している拡大教科書の活用可能性も指摘された。しかし、現場ではこれらの教材の存在が十分に認知されていなかったり、利用環境が整っていなかったりする課題も明らかになった。これらの議論を通じ、新たな指導法を支える具体的な手法と環境整備の重要性が浮き彫りとなった。

多様な授業方法の可能性が示された一方で、それらの実践をいかにして子どもの道徳性の育成に結びつけるかが、今後の探求課題として確認された。

今回のラウンドテーブルでは、写真のみの教材や先哲の言葉の活用、心理学理論の応用など、従来の枠組みにとらわれない多様な指導法が提示され、道徳教育の新たな可能性が示された。質疑応答では、それらの斬新なアプローチをどう具体的に授業で展開するのかという方法論に議論が集中した一方で、各実践が道徳教育の核心である「子どもの道徳性の育成」という目標にどう結びつくのか、その効果を深く検証することが、今後の共通課題として明確になった。

第４部会

研修会での指導・講話の 10 分間…何が知りたい？何を伝える？
～道徳科授業の特質や基礎・基本はどこにあるのか～

企画者：杉本遼（宝仙学園小学校）・髙宮正貴（大阪体育大学）
司会者：杉本遼
報告者：中野浩瑞（箕面市立西小学校）・彦阪聖子（堺市立市小学校）・髙宮正貴
指定討論者：浅見哲也（十文字学園女子大学）・木原一彰（鳥取市立面影小学校）
森田悠希（佐伯市立渡町台小学校）・宮崎貴耶（枚方市立五常小学校）

【企画趣旨】

本ラウンドテーブルでは、道徳科授業の「研修」に視点を当てる。

本学会には、道徳科授業の研修会で指導や講話によって、道徳科の特質や基礎・基本を踏まえた道徳科授業を広める立場にある方も少なくない。しかし、「道徳科の特質や基礎・基本がどこにあるのか？」と問われると、道徳科授業観によって、強調点は異なるであろう。

道徳科の授業に苦手意識をもつ教員やこれから道徳科授業に関心を高めていこうとする若手教員は何を知れば、納得感をもつか。何を伝えれば、道徳科授業をよりよいものに前進させていくことができるだろうか。

【報告記録】

「10 分間の指導・講評を任せられたとするならば、何を話すか？」ということをテーマに報告した。中野浩瑞は若手・中堅の教員の立場から、彦阪聖子はベテラン実践家の立場から、髙宮正貴は大学教員の研究者の立場から強調点を報告した。

・中野浩瑞

「教師のマインドセット」が道徳科授業の出発点。子どもが「自分の生き方を語れる」授業こそが本質であり、そのためには予定調和を避け、子どもの語りや沈黙、戸惑いを含めて大切にする構えが求められる。道徳科の学びは、道徳的場面の追体験、友達の生き方に触れる、当たり前を問い直す、道徳的に思考する、自分を知る時間である。

・彦阪聖子

「待ち遠しいな…へのプレリュード」と題し、支持的風土の中で子どもが安心して自己を開ける道徳科授業の在り方を語った。授業を「共に考え、心が磨き合える時間」と捉え、子どもが道徳を楽しみにできるような雰囲気づくりの大切さを共有した。

・髙宮正貴

道徳科授業の設計には「教師が内容項目を深く理解すること」が不可欠であると述べ、内容項目に基づく道徳的価値の把握、主題設定と学習問題、人間の弱さへの基本発問、追発問の設計という 4 プロセスを提示。また「価値理解・人間理解・他者理解」に基づいた深い授業構築を論じた。

【議論の記録】

報告を受け、「道徳科授業の特質や基礎・基本はどこにあるのか」について、指定討論者の浅見哲也・木原一彰と、提案者・フロアの方々と共に話し合い、よりよい指導・講話の内容について議論した。

・木原一彰
「価値観の更新」と「探究的な学び」を中心テーマとし、道徳科授業も習得・活用・探求の三段階で構築すべきと指摘。子どもが既存の価値を活用しながら教材の問いと向き合い、新たな見方を獲得するプロセスが必要であり、発問は教訓提示ではなく、子どもの思考を促す装置であるべきであると論じた。
・浅見哲也
「授業構想は道徳科の目標を理解することから始まる」とし、道徳的価値を多面的・多角的に捉えることや、教科書に依存しすぎず教師の教育観に基づいて構成することを提起。授業は「子どもの学びのプロセス」から設計されるべきであると論じた。

参加者からは、各報告者の提案や議論に対して多くの共感と具体的な質問が寄せられた。中野氏の「見えづらいものを教師の視点を変えて見えるようにする」という姿勢には、授業評価の在り方を見直すきっかけになったとの声があり、子どもの事実や姿を価値付けし、授業改善のやりがいにつなげる重要性が共有された。彦阪氏の「子どものよいところを見つける」という提案にも強い共感が寄せられ、子どもと学び続ける姿勢の大切さが再確認された。さらに、高宮氏の中心発問の提示の早さや、人間理解を重視する理由に関する質問も多く、人間の弱さを見つめる視点の重要性が指摘された。

議論の中では、「道徳科の目標を大事にすること」や「研修会のテーマやニーズに合わせること」の重要性に、多くの参加者が納得を示した。これを受け、会場全体で「自分の道徳授業のこだわりは何か」というテーマについて意見を交わした。その過程で、「10 分間の講話と長時間の研修では伝える内容が異なること」、「参加者に明日から使える How to 的要素を盛り込む必要性」など、研修構成に関する具体的な提案も生まれた。

また、参加していた大学教員からは「教科化によって道徳の授業時間は確保されたが、質的な高まりを目指す動きが十分でない。学生や若手教員が、すごいと思える先輩教員と出会い、授業の枠組みを捉え直す機会を持つことが大切」との現状と提言が共有された。さらに、「研究授業や日常授業の参観を通して方法と理論を同時に学びたい」という要望や「授業者の声や悩みに寄り添いながら背中を押すことの難しさ」についての問いかけも挙げられた。

さらに、その討論を受け、若手教員の立場から森田悠希が指導・講話で「何が知りたいか？」、現役小学校教員でありながら大学で講義をする立場から宮崎貴耶が「何を伝えるか？」をまとめラウンドテーブルのまとめとした。

・森田悠希
理論よりも先に「具体的な授業づくり」が知りたいという若手教員の実感を提示。授業設計・発問構成・活動案など即効性ある研修のニーズを明示し、実践を通じて理論に向かう循環型の学びを提言した。
・宮崎貴耶
研修の役割は「教師の心に火をつけること」だとし、実践・マインドセット・理論の三層構造を持つ講話の必要性を提案。「今日の授業」「明日の学級」につながる即効性と、教育観を揺さぶる遅効性の両立を説いた。

本ラウンドテーブルでは、10 分間の講話を切り口に、道徳科授業の核心に迫る多角的な知見が提示された。共通するのは「子どもを見る」「教師の思いを形にする」授業観であり、実践・理論・価値観の往還を通して、これからの道徳教育を拓く手がかりが見出された。

さらに、発問や板書、展開構成など具体的な授業づくりの方法論や、若手教員が求める研修の必要性を再認識した。

今後も、日々の授業改善と長期的な育成の両面から道徳科の授業を発展させていく必要があることが共有した。

第５部会

“決めること”は道徳科に何をもたらすか？

企画者：礒部光泰（富津市立富津小学校）
司会者：礒部光泰（富津市立富津小学校）
報告者：糟谷樹理（仙台市立北六番丁小学校）
　　町田晃大（大田区立梅田小学校）
　　礒部光泰（富津市立富津小学校）
指定討論者：足立佳菜（佐賀大学）
　　：中西亮太（東京大学）

【企画趣旨】

本ラウンドテーブルの目的は、“決める”という学習活動が道徳科にもたらすものを提示し、指定討論者からの論点を踏まえ、参加者の皆さまと活発な議論をすることである。

教育の目的は「平和で民主的な国家及び社会の形成者」の育成である。しかし、現代社会に目を向けると対立や分断という言葉が溢れて久しい。戦争や紛争は相次ぎ、独裁的な振る舞いを渇望する事態にさえある。このような社会情勢を踏まえると、対立や分断、争いを解決するために民主的な手続きを児童生徒が身につけることは、教育に課せられた課題である。そして、先の目的に基づいて行われる道徳教育および道徳科の使命とも考えられる。道徳科は「解決に向けて合意形成することを目的とするような時間ではない」（文部科学省，2016）とされる。しかし、主体的で対話的な手続きが児童生徒の道徳性を高めることは先行研究から示されている（金澤・河野，2024）。合意を形成するような“決める”学習活動が、児童生徒の**道徳性を高めるための方法として可能性あること**を探りたい。

【報告記録】

各報告者による記録は、以下の通りである。

糟谷報告：「合意形成を目指した道徳授業―『ボールの決まり』の授業実践を通して―」
報告からは「反省的均衡」を活用した実践が報告された。報告では、光村出版の『ボールの決まり』を教材として、合意形成と共通解を見出す段階を分析し、児童の道徳的判断力が高まったことが示された。

町田報告：「道徳科における“決める”学習は児童にどのような変容をもたらすのか―本質観取の実践を手がかりに」
報告からは「本質観取」の実践を報告された。報告では、「親切とは何か」を定義する過程における本質観取の実践を詳細に分析し、継続的な対話を通じて児童の道徳的価値の理解の高まりが示された。

礒部報告：「『決められない』状況が道徳科にもたらすものーラディカル・デモクラーに基づいた道徳授業の構想と実践を通してー」
礒部会員からは、シャンタル・ムフの「ラディカル・デモクラシー」に基づいた道徳科の授業が報告された。報告では、集団で“決めること”を目指しながらも、“決められない”という状況が児童の道徳的価値の再構成を迫り、その際に生じる「もやもやする」や「わから

ない」「決められない」という曖昧な状態に持ちこたえるという「道徳性」を高めることが示された。

【議論の記録】

以下に示す指定討論者の中西・足立両会員からのコメントや、フロアからの質問は非常に有意義なものであった。

中西会員からのコメント：現代の価値複数社会における「決める」ことをめぐって、道徳科では、真理に基づく一元論的な対話では特定の意見を排除しがちであり、相対主義的な対話では実践的な結論に至らないため、両極端を回避することが求められる。３つの報告についてもこれらの観点から考察される必要がある。ロールズの反省的均衡に依拠する糟谷実践は、多様な意見から何を基準に「決める」のか、また価値観を共有しない集団との熟議の可能性について問いかけられるだろう。ムフのラディカル・デモクラシーに依拠する礒部実践は、対立の重要性を示す一方で、彼女が重視する情念（passion）を対話にいかに組み入れるかについてさらなる検討が必要だろう。本質観取に依拠する町田実践は、対話の中で適宜行われる「決める」という行為によって対話の結論が変更される可能性、あるいは意見が対立し続ける可能性をどのくらい織り込んでいるかが問われるだろう。

足立会員からのコメント：道徳科における「合意形成」の役割と特別活動との差異化ついて「道徳の時間」初期には「すべての者が納得し、一地点に到達することを目指して話し合う」学習活動も想定されていた。「合意形成」に拒否感が生じた変遷自体を探る必要がある。一つには特別活動との差異化があろうが、合意形成をしないこととそれが目的でないことは峻別されるべきである。糟谷実践は道徳科が民主的人間育成を担ううえで、礒部実践は「決められない」ことを学びに位置づける可能性（特活では「決められない」ことはよくない状態)、町田実践は「価値の理解」を深める過程として、道徳科固有の「合意形成」の意義が見いだされるのではないか。

フロアからのコメント：最終的にひとつの結論に教師が誘導してしまう可能性はないか。

糟谷会員の応答コメント：　合意形成のプロセスをどのように把握し、そこで子どもがどのように理由を吟味し原理を選び取っていったのかを、より焦点化して分析する必要があると考える。その上で、ロールズの反省的均衡の理解をさらに深め、納得解と合意形成との関係を教育的に位置づけ直すことで、研究の意義を一層明確にしていきたい。

町田会員の応答コメント：最終結論を固定する行為ではなく、暫定的な合意を形成する営みである。したがって、結論が変わる可能性や意見の対立は織り込み済みであり、それ自体が探究を深める契機となる。また道徳科では、本質観取を通して得られた気づきを相互に確認し合うことが、児童が価値をより自覚的に理解し、他者と共有するために不可欠である。合意は常に暫定的であり、そこから新たな思索や対話へと開かれていくのである。

礒部会員の応答コメント：道徳教育の枠組みにおいて、情念をいかに組み入れるかという点については慎重に検討する必要がある。対話における情念の組み入れを、「理性的な語り以外の方法」として捉え、探究したい。また、「決められない」「わからなくなる」ことの許容が、道徳科の固有性のひとつであることを探究していきたい。

第６部会

未来社会に生きる子供たちへ培いたい道徳的資質・能力とは何か

企画者：治田和也（流山市立おおぐろの森小学校）・田沼 茂紀（國學院大學〔名誉〕）
司会者：田沼 茂紀（國學院大學〔名誉〕）
話材提供者：治田和也（流山市立おおぐろの森小学校）
報告者：梅澤 正輝（杉並区立桃井第三小学校）
　　：小山 統成（横浜市立東汲沢小学校）
　　：丸山 雄志（川崎市立有馬小学校）
　　：園山 久美子（横浜市立樽町中学校）
コメンテーター：澤田 浩一（國學院大學）

【企画趣旨】

本ラウンドテーブルは、VUCA な時代と称される予測困難で見通しが立ちにくく複雑で曖昧性が高い現代社会における道徳教育ではさらにその先に続く未来社会を生き抜く子供たちの道徳的資質・能力をどう考え、どう育めばよいのかという喫緊課題を議論し合うことを目的として設定された。

そのテーマに迫るための切り口となるのは、道徳的価値観の多様化と相対化の進行という現在社会ならではの事情を背景にした道徳教育推進時の揺らぎの克服という切実な視点である。道徳教育、とりわけその要の時間である道徳科指導にあっては、子供たちが主体的に考え、語り合い(議論)、体験する場を通して学ぶことが必須となろうが、その際にコンテンツベースでなくコンセプトベースな視点でどう道徳的資質・能力を捉えていけばよいのかを共通理解し合い、ぶれや揺らぎの生じない指導の在り方を検討し合っていくことが必須要件となってくるであろうと考える次第である。それらを議論の柱立てとした。

【報告記録】

① 報告テーマ「児童の問題意識を授業展開にどう生かすか」(梅澤正輝)

主体的な道徳科の学びを実現するためには、児童の問題意識が不可欠である。道徳科授業において、児童の問題意識をどのように引き出し、展開に生かすことができるのかということについて、いくつかの授業パターンを示しながらテーマに迫っていった。

② 報告テーマ「道徳科における自己調整スキルと教師のかかわり」(小山統成)

自己調整を道徳科の学習過程の中に位置づけることによって、学習者自身に自らの学びの先にあるものへの見通しをもたせることで、よりよい生き方を求める主体性を育むことになると考えた。そのための手立てとして学習に対する個のめあて設定を促し、目的的目標をもって探究する授業づくりのための教師の関わり方について実践提案した。

③ 報告テーマ「オーセンティックな学びを促す学習材ユニット」(丸山雄志)

閉ざされた教室空間での正解主義的な道徳科授業では、子ども達に生きて働く力を育むことは難しい。そこで、実際の社会事象として生じている道徳的事実を学習の中に織り込むことで、正解主義では解決できない問題点に気づき、真正な道徳的課題解決とは何なのかという視点から生きて働く道徳的実践力育成への取り組みを提案した。

④ 報告テーマ「中学校現場における道徳科の現状と課題を見出す」(園山久美子)

道徳科において生徒の主体性が存分に発揮されるであろうと期待する授業モデルを検討・開発し、それを複数の教員によって授業実践した後に生徒へインタビューしてその発言から見いだされる中学校での道徳科の現状と課題を複眼的に考察した。

【議論の記録】

〔梅澤提案〕

・問題意識をもつためには問いが重要である。ただ、テーマをもつことに身構えてしまう子どもの実態もあろう。それを解決するためには道徳科と他教科とが一体となったユニット学習という発想が必要である。また、そのユニットを通してどのようなモラルラーニングスキル（MLS：道徳的資質・能力）を育むのかという視点が必要である。その際に求められるのは、肌感覚でないルーブリックのような成長の見とりが重要であろう。また、ユニット学習では授業と授業との間が空くことになるので、ツァイガルニク効果を活かすための対応についても考えていく必要があろう。

〔小山提案〕

・道徳科では自分事として気づく、学び深める、納得して受容する事ことが大切であり、価値に自分なりの意味を見出した時に意味ある学びとなる。教師の役割は、学んでいる子どもに目を向け、その子が自ら動いていると気づかせる、考えさせることが大切である。このような自己調整学習では、自分事として気づく、学び深める、納得して受容するといった価値に自分なりの意義を見いだした時、子どもにとって意味ある学びとなる。こんな自己調整学習で大切なのは、見通し→遂行→自己省察の過程において一人きりではなく、他者との関わり合いの中で具体化されるという発想がとても重要である。

〔丸山提案〕

・実態として、主体的に学びに取り組めない子どもが多くなっている。道徳科では、実効性の伴う力（MLS）の質的担保が必要である。そのためには授業デザインが大切で、オーセンティックな学び、現実に即して自分事として考える学びが必然となる。その実現においては、発達段階に即した学習材ユニットが不可欠である。その学習材ユニットにおいては登場人物への単なる共感ではなく、現実的な文脈にまでその共感度を下げて自分事の現実問題として捉え、客観的に考えながら解決していけるようにすることが必要である。

〔園山提案〕

・真に主体的な道徳学びを実現するためには、価値観の押しつけとならないようにしなければならない。道徳科授業では、生徒が自ら問題を発見し、自分ならどうするかを考え、判断していく姿が求められる。そのような姿こそ、生徒エージェンシーを発揮させながら議論を深めていくための学びそのものであり、生徒一人一人のウェルビーング向上に寄与する上で不可欠にものである。教材「足袋の季節」での授業では、仮説検証のために学びのシートを用いたが、二度目の実践では生徒自身が選ぶという行為を取り入れたことによって主体的な学びの促進や思考の深まりを促す一助となっていた。

《コメンテーターの取りまとめ：澤田浩一先生》

自己調整学習では、問いが重要な役割を果たすことであろう。その際、現実的な問題としてその学習に耐えられる教科書教材が必要となってく。その点については、当然ながら教科書教材への不満も出てくるであろうと考える。同時に子供たちの主体的な学びを大切にするためには、共に子どもの学びを創っている教師が道徳科授業をどう考えているのか、どのような問いを立てようとしているのか、その展開で目の前の子ども達たちが果たしてついてこられるのかをしっかりと考えていくことが大切であろう。

言うまでもなく、子ども達の学習実態は各学校、各地域によって違うことを前提に認知的、情動的な面、どうやって統合していけるのかが教師の課題でもあるが、成長するというマインドセットをもたせたい。主体性を授業に反映できる子ども達⇒授業の中でどう子ども達に主体性をもたせていくのか、教師の実践に裏打ちされた「子どもを伸ばそうとする姿勢こそが大事」ということに尽きるであろう。

第７部会

「ドーパミン中毒」社会における道徳性教育 -食育による脳機能ホメオスタシスの維持-

企画者：鑓水 浩（旭川市立大学・育英大学）
司会者：鑓水 浩（旭川市立大学・育英大学）
報告者：手塚　貴子（育英大学非常勤講師 燕市屋内こども遊戯施設「ハレラテつばめ」）
　　：池田 樹（南魚沼市立塩沢小学校）※当日欠席
指定討論者：植田 清宏（大手前大学非常勤講師）

【企画趣旨】

脳内伝達物質のドーパミンは人間の行動を決定する大脳基底核ループでの強化学習を促進する働きがあるが、報酬系が必要以上に活性化されるとその傾向はさらに促進され快情動を得る行動選択が顕著になる。これは依存状態であり生体ホメオスタシスの機能から離脱症状を経て一層の快情動を渇望する報酬飢餓状態に陥る。この「ドーパミン中毒」は「依存症」の蔓延として世界的に社会問題化しているが、ジャンクフードに代表される(UPF Ultra-processed foods:超加工食品)の恒常的摂食においても同様の状況になり得る。本部会では「ドーパミン中毒」に至る脳機能の機序を示した上で、依存状態を防ぐための食育関連教材とそれを活用した実践事例を紹介し、道徳教性育への新たな視点への議論を行う。

【報告記録】

まずはじめに企画者である鑓水会員より次の内容の基調提案がなされた。人類の進化の過程では、ドーパミンの分泌の活性化が厳しい自然環境の下での食料確保に寄与し、また新しい土地へ進出していく際の新奇性も担ったと思われるが、それらを進めていく上ではかなりの苦痛も伴ったであろう。そのことが生体のホメオスタシス上ではバランスをとることにもなったのだが、現代では食料確保だけでなく何事においても苦痛が取り除かれ快情動ばかりが追求されている。その１つの形が UPF である。快情動を求めることに特に問題もないようにも思われるが、実際には快情動と苦痛つまりドーパミンとコルチゾールやノルアドレナリンとのバランスが崩れ、結果的により多くの快情動を求めることにより様々な弊害が惹起するというパラドックスに陥ることになる。この「ドーパミン中毒」状態に対する有効な方略の１つとして食に関する教材の活用が挙げられる。摂食というのは我々が生きていく上で欠かせない行為であるが、実は他の生物の苦痛の上に成り立っている、ということを改めて教材として取り上げることで、人間が自らの快情動のみを追求する姿勢に警鐘を鳴らすわけである。

次に報告者１として手塚会員から、会員の地元である新潟県での柿の生産及び関連した食品ロス状況についてまず説明があり、そして自らが携わった渋柿を利用した『まるごと柿そーす』の開発プロジェクトについて、開発した製品の実物も持参して会場の参加者と試食も進めながら報告を行った。柿は渋柿が本来の姿であり、どこをとっても栄養の豊富な優れた天然食品であるが、飽食の時代という背景から廃棄されることが多いのが実態である。そこで、その有効活用としてこのプロジェクトを進め、見事に日本食糧新聞社主催の第 10 回介護食品・スマイルケア食コンクール「噛むことに問題がある人（咀嚼困難者）向けの食品部門」で金賞を受賞した、とのことである。

次に報告者２として池田会員からの説明の予定であったが、体調不良でのため当日欠席となり、司会の鑓水会員が代理で報告することとなった。内容は「いわしのひゃくじろう」という自作教材を用いた南魚沼市内小学校での授業報告である。この教材は「ひゃくじろう」

という名前のいわしが仲間たちと気持ちよく海を泳いでいたところ仲間もろとも漁船に捕獲され、気が付いたらまな板の上で人間に調理されるところであった。だが、彼は自分は死んでも自分を食べることになる人間の一部になって生き続けるというメッセージを残す、という内容のものである。授業対象は低学年特別支援学級児童であり、食や魚そのものに対しての関心を高めることはできた。ただし、魚が食材として加工されて我々の口に入るということは十分には把握されていないようであり、命についてのメッセージについての理解はもう一つとのことであった。

最後に指定討論者の植田会員からは基調提案や各報告内容に関して、現代での道徳教育においては脳科学分野とその観点や関連した社会的な取り組みを反映させた教材活用が重要であることの指摘があった。その上でＲ A.ポルドラックの理論を手がかりにしながら、選択構造を考慮することによって問題につながる習慣の引き金を最小限に抑え、望ましい行動を促す「イフゼンルール」の考えを、道徳教育においても取り入れることを提案した。

【議論の記録】

・UPF について報告があったが、現状としてどの程度の深刻さがあるのか。

－日本においては食品についての基準が厳しいこともあり、それほど注目を集めていないのが現状だが、世界的には大きな問題となっている。代表的なものは砂糖を中心とした糖質依存であり、世界的大手食品メーカーでは加工でんぷんなど限られた工業的生産素材に大量の砂糖や添加剤で風味や食感を加え低ることでコストを抑え、低価格で販売することによって発展途上国においても売り上げを伸ばしているのが現状である。具体的にはある清涼飲料水には 500ml あたり角砂糖にして 17 個分の砂糖が入っているが、冷却して飲ませるようにしているので甘味に鈍感になり、知らず知らずのうちに依存状態となってしまう。

・UPF の人体への影響は他にどのようなものがあるか。また学校での給食や食育での指導はどうあるべきか。

－UPF は限られた栄養素材しか使用していないので、栄養のバランスは非常に悪い。このことは腸内細菌叢にも悪影響を与えており、その結果、例えばセロトニンの前駆物質は腸内細菌が産生し脳に送られているが、これが障害される。脳ではニューロンを支えるグリア細胞に異常が生じることになり、道徳性に影響が出ることにもなる。また糖質が多いことから肥満化の問題がある。実際 UPF の摂取量が多い地域では子どもについても肥満傾向が高く、健康上の問題も多いという報告がある。学校での指導については、今日の報告にもあった通り食についての教材の活用が考えられるが、保護者、家庭についても啓発的な指導も行い良き食習慣をつけてもらうことが必要である。

・地域の食材を生かすというメリットは何か。また柿以外のユニークな取り組みはあるか。

－ 単一の作物を大規模に生産するというのは一見効率的だが、一たび災害や病気が発生した時には致命的な状況になる。その意味では昔からその地域の風土に合わせてつくられてきた作物というのは全体から見れば多様性があり、また作物としての生きる力も強い。同様のことは農作物だけでなく畜産にも言えるだろう。機械的な大規模飼育は動物の生について無視した方法であり、結果として品質という面でも問題が生じる。柿以外にも価格高騰で問題となっている米の自然栽培や豚を家族単位で飼育する「腹飼い」というユニークな方法等、様々なものがある。これらは農作物であれ家畜であれ生物として生きることを重視したものであり、その点においては重要な道徳教育的観点となるものである。

〇参加者は少なめであったが、白熱した議論となり非常に有意義な機会であった。内容としては道徳性教育として異質なものと映るかもしれないが、重要な要素となるものである。

第８部会

主体的な生き方を探求する子どもの道徳学習をつくる
―「仕組み」×「仕掛け」から子どもの探求心をくすぐる―

企画者：　幸阪　創平（東京学芸大学附属竹早小学校）
司会者：　和井内　良樹（宇都宮大学）
報告者：　佐藤　淳一（東京都町田市立相原小学校）
　　箱﨑　由衣（東京都港区立笄小学校）
　　久我　隆一（東京都調布市立上ノ原小学校）
　　古見　豪基（埼玉県和光市立第四小学校）
指定討論者：永田　繁雄（東京学芸大学）
　　浅部　航太（東京学芸大学）

【企画趣旨】

私たちはこれまで，「どのようにして主体的な生き方を探求する子どもの道徳学習をつくることができるのか」という問いを基軸に，第 102 回宮崎大会，第 103 回石川大会，第 104 回静岡大会のラウンドテーブルに取り組み，それぞれの機会で，「カリキュラム・デザイン」「教師の子どもへの関わりや立ち位置」「発問構成」「教材の選定・吟味」「問いづくり」といった多様な視点から，実践授業をもとに議論を重ねてきた。
しかし，これらの視点は授業の中でそれぞれが独立して機能するのではなく，相互に関係し合いながら，子どもの探求心を揺さぶり，学びを動的に構成していると考えられる。

そこで本ラウンドテーブルでは，こうした多様な視点を「仕組み（構造や機能）」と「仕掛け（機能を発揮させるための工夫）」という枠組みで整理する。そして，それらの掛け合わせがいかにして子どもの主体的な生き方の探求を促す道徳学習を生み出しているのかについて，ダイナミックに検討することを目的とする。

また，単なる技法論にとどまらず，「なぜ今，主体的な生き方を育む道徳学習が求められるのか」という根本的な問いにも立ち返りながら，授業づくりの本質に迫る議論を展開したい。現場実践のリアルと理論的考察が交差する本企画を通して，参会者の皆様と共に，新たな道徳教育の地平を切り拓く機会としたい。

【報告記録】

佐藤会員は「生き方を考える仕組みと仕掛けによって，主体的に学ぶ児童の育成を目指して」〈低学年〉と題し，生活に結びつく教材を活用しながら，学びの主体性を促すための「仕組み」と「仕掛け」について提案した。問題解決的な学習過程，発問の工夫，教材の吟味などの教師の仕掛けによって，子どもが主体的に学ぶ実践を報告した。

箱﨑会員は「道徳科授業づくりの仕組みと仕掛けで，主体的な生き方を探求する授業を拓く」〈低学年〉と題し，子どもが自己の生き方を主体的に見つめ続ける力を育む「仕組み」として，「AAR サイクル」を道徳授業に導入した実践を提案した。また，そのサイクルを効果的に機能させるための「仕掛け」について，実践の具体を通して報告した。

久我会員は「道徳科授業づくりにおける仕組みと仕掛けについての一考察―教科教育の視点から―」〈高学年〉と題し，事前に把握する各教科の文化的内容を「仕組み」，子どもの実態に応じたアプローチを「仕掛け」として，子どもが道徳的価値に当事者意識をもてるように構想した，教科等との関連を図った実践を提案した。

古見会員は「子どもの主体性を育む道徳学習における教師の『仕組み』と『仕掛け』のシナジーを図る ―『福祉問題』を軸に―」〈中学年〉と題し，道徳的な善さを基軸に据えたカリキュラム・デザインを「仕組み」，学びを日常の実践へと結びつけ，子どもの内面的な自覚を深める工夫を「仕掛け」として捉える教科等横断的な実践を提案した。

【議論の記録】

本ラウンドテーブルでは，各報告者の実践における「仕組み」と「仕掛け」を指導観のレベルにまで掘り下げて議論することができた。以下に，その関係性を整理する。

まず，佐藤会員は「子どもの問題意識から学習が始まり，追求心を高めて学習を終える」という授業構造を「仕組み」として設定していた。この背景には「道徳授業において，子どもが自分自身の価値観に基づいて考えることを大切にしたい」という指導観がある。その実現のために，子どもの多様な問題意識に応じた発問をあらかじめ準備したり，話し合いの方法を工夫したりするなど，具体的な「仕掛け」を講じていた。

次に，箱﨑会員は子どもが自らの学び方を生かしながら思考を深められるよう，「AAR サイクル」を「仕組み」として授業に導入していた。その基盤には，子ども同士の協働的な学びを通して他者理解を促進し，そこから自己理解を深めていきたいという指導観がある。教材の登場人物の気持ちや行動の変容に着目させたり，思考のずれを顕在化させたりするような発問を「仕掛け」として位置づけていた。

続いて，久我会員は教材に内包される社会的・文化的な要素の明示や，教科・教育目標との関連づけを通して，教材自体の構成を「仕組み」として捉えた。その背景には，教材を媒介として子どもが道徳的価値の本質を捉えることを重視する指導観がある。そのために，道徳的諸価値や子どもの実態に応じて教材を分けて提示したり，対話の中で意図的に追発問を取り入れたりするなどの「仕掛け」を講じていた。

最後に，古見会員は道徳科と他教科との連携を図る教科横断的なカリキュラム・デザインを「仕組み」として構築していた。その背景には，子ども自身から生まれる問いを継続的に更新し，それを主体的な生き方の探求へとつなげていきたいという指導観がある。授業では，子どもの問いを引き出し，それを深め広げる教師の問い返しを「仕掛け」として活用していた。

このように，「仕組み」と「仕掛け」の視点から授業づくりを分析することで，各実践において教師が大切にしている指導観が明らかになった。近年，教育現場ではコストパフォーマンスやタイムパフォーマンスの観点から，効率的な発問構成法やパターン化された板書例などが注目されている。これらは「仕掛け」に該当するが，「仕掛け」だけに焦点を当ててしまうと，授業づくりが表層的な技法論にとどまりかねない。

今回のラウンドテーブルでは，「仕組み」と「仕掛け」の双方を行き来しながら授業実践を捉えることで，教師が目の前の子どもにどのような学びを届けたいのかという願いを方法知と内容知の両面から議論できた点に大きな成果があったといえる。

一方で，今後の課題としては，道徳科における学びをどのように「主体的な生き方の探求」へと深化させていくのか，という視点が挙げられる。主体的な生き方の探求は，特別活動や総合的な学習の時間においても可能である。その中で，道徳科を核としてどのようなアプローチを展開していくのかは，教師が道徳科の特質をどのように捉え，どのように生かそうとしているのかの吟味が不可欠である。

今後も，こうした教師の指導観を起点に，「仕組み」と「仕掛け」の相互作用を探りながら，道徳科の可能性をさらに切り拓いていく検討を深めていきたい。

第９部会

『共生社会を生きる力を育てるプロジェクト型道徳学習』
―個々のよりよい生き方と集団や社会のよりよい在り方を目指した社会的課題への対応―

企画者：齋藤　道子（目白大学）
司会者：齋藤　道子（目白大学）
報告者：池堂　正伸（東京都葛飾区立細田小学校）
　　：澤井　史郎（インターナショナル　イスターミヤスクール大塚）
　　：齋藤　大地（宇都宮大学）
　　：時枝　智美（学校法人別府大学明星小学校）
　　：東風　安生（北陸大学）
　　：齋藤　道子（目白大学）
指定討論者　：藤井　基貴（静岡大学）
アドバイザー：押谷　由夫（昭和女子大学名誉教授）

【企画趣旨】

今、世界は、グローバル化や情報化のさらなる進展により、多文化共生社会及びAIとの共存社会となり、多様な他者が、多様な場所で、多様な価値観を持ち、多様な目的をもって複雑に入り混じって共に生活する社会へと変化している。そうした中で、個のよりよい生き方を追究しつつ、共に生きる基盤であるよりよい社会を創造するためには、今後、どのような「道徳性」及び「道徳的資質・能力」の育成が求められるのだろうか。本ラウンドテーブルでは、「社会の縮図」でもある学校の現状に視点を置き、多様な背景を持つ多様な他者が共に学び生活する上での課題とその解決に向けた実践について報告し、指定討論者及びアドバイザーの鋭い視座の下にフロアーとの協議を深め、現代の社会的課題への対応を目指した「道徳性」及び「道徳的資質・能力」の育成についての新たな展望を拓く。

【報告記録】

＜１．趣旨と目的＞タイムライン［１．企画の趣旨と目的　２．学校現場における課題報告と提案　３．課題解決に向けての実践報告と提案　４．今後の道徳教育・道徳科についての協議　５．総括］に基づいて進めた。また、趣旨と目的については、［リサーチクエスチョン：２１世紀の多文化共生社会・AIとの共存社会を生きていくうえで求められる「道徳性」及び「道徳的資質・能力」とは何か。また、今後、それを具体的にどのように育んでいくのか。］を明示し、上記目的をフロアーと共有した後に２部形式で協議を行った。

＜２．学校現場における課題報告と提案＞　　第１部

(1)池堂正伸の報告：

通常学級における共生に関わる課題として、子供たちの多様化や価値観を指摘し、哲学対話を通して見出す共生の可能性に関して発表した。SNSの普及による意見の分断や関係性の希薄化といった課題を踏まえ、共生社会に不可欠な力として、異なる考え方を受け入れる姿勢、分断を乗り越える想像力と対話力を挙げた。また、道徳科の授業における課題として、新たな価値を獲得するための議論が不十分である点を指摘し、哲学対話の導入による授業実践の成果と今後の課題について報告した。

(2)澤井史郎の報告：

日本在住の外国人の増加を背景に、マジョリティとしての日本人の子供と、マイノリティとしての外国人の子供という構図の中で、互いのアイデンティティが果たして保障され、共有できているのかという問題を提示した。また、カメルーン生まれのＤ児（１年生）の通常学級での１年間の観察記録を基に、道徳科の授業への参加の難しさや、学校全体で取り組む道徳教育を通して「道徳性」を身に付けていく姿から、実践を通じて共生を育む必要性について報告した。

(3)齋藤大地の報告：

共生社会を「障害の有無や国籍の違いなど、さまざまな属性を持つ人々が尊重される社会である」として、インクルーシブ教育の重要性を強調した。また、通常学級における多様な子供の存在状況を数値や図で示すとともに、ASD（自閉スペクトラム症）の子供たちが感情移入しやすい教材を紹介した。加えて、道徳科の授業が共生の可能性を学ぶ場である一方、分断を広げるリスクもあることを指摘し、“普通”や“当たり前”とされてきた価値観に偏らず、より柔軟で寛容な視点で捉えていく必要性について述べた。

＜３．課題解決に向けての実践報告と提案＞　　第２部

(4)時枝智美の報告：

目指すべき共生社会とは「自分を大切にし、他者も大切にし、みんなが幸せに生きる社会」であるとし、道徳教育と人権教育の連携を図った道徳科と特活を組み合わせたプロジェクト型道徳学習を構想した。「みんなが幸せになれる学級にするためには何が大切なのか」について子供たちが主体的に考え、最終的には「相手を大事にしなければならない」という結論に至った。単元を組んで継続的に取り組むことの有効性を強く実感したと報告した。

(5)東風安生の報告：

互いのよさを認め合いながら共に生きる社会の形成を目指す上では「市民性」の育成が必要であるとし、キーワードを総合単元型プログラム・市民性の育成・多様性の尊重・インクルージョン（包摂）とした。小学校高学年を対象に２つのタイプの総合単元型学習プログラム（A・B）を構成し、市民性の育成に対する有効性を検証した。その結果、学校行事・体験活動・道徳科をバランスよく配置することで市民性の育成が可能になると報告した。

(6)齋藤道子の報告：

よりよい自己及び人間としての生き方や在り方を生涯に亘って探究し、実践していくためには「道徳性」の育成に加えて、現代社会を生きる上で求められる「道徳的資質・能力」の育成が必要であると指摘した。そして、「人権感覚及び人権意識の涵養」を目指した「総合的な学習の時間」と「道徳科」との効果的融合を図った複線型のプログラム型道徳学習を提案し、質的・量的分析に基づいてその有効性について報告した。

【議論の記録】

第１部では、３名の先生から質疑があり、「人間として立場は同じ」という概念や、「違うのが当たり前」という認識が教室に拡散していくことの重要性が共有された。哲学対話については、**指定討論者**が、今後、言語面の分析や発話内容を基に実証的研究を行う必要性を指摘した。また、全教育活動を通して共生感覚や意識を育成していく重要性も共有された。

第２部では、２名の先生から①「総合単元的道徳学習を行う際の「ねらい」は、何を目的としたのか。」②「道徳科の役割とは何か。道徳科がすべきこととは何か。」等の質疑があり、フロアーを交えて深く協議し、今後、明らかにしていくべき課題が共有された。

指定討論者からは、各報告を受けて「共生をめぐる各実践と道徳科の可能性」について考察がなされ、今後「道徳科が共生に果たしうる役割」として、①存在の相互承認を促す場としての道徳　②内容項目「寛容」や「正義」の再解釈　③対話を通しての共創が指摘され今後の道徳科の授業を考える上での貴重な示唆を得た。加えて、**アドバイザー**からは、道徳科のよさは「自分事として考える」ことを柱として、道徳的な事象や状況を多様な視点から捉え直し、自分の道徳的成長を実感できるようにすることであることが伝えられた。

第 10 部会

道徳科教育学の理論的基盤となる哲学―道徳的判断力を育成するために―

企画者：柳沼 良太 （岐阜大学）
司会者：岡島 佑樹（海津市立平田中学校）
報告者：寺崎 賢一（元都留文科大学・非）
：木野 正一郎（IPU・環太平洋大学）
：大藏 純子（名古屋経営短期大学）
：柳沼 良太（岐阜大学）

【企画趣旨】

道徳科教育学を構築する上で重要になるのは、その理論的基盤となる哲学である。道徳科の存立基盤を形成する上でも、道徳の判断基準を設定するためにも、その理論的基盤となる哲学が必要になるからである。特に、道徳科授業においては、子どもたちが道徳的問題を考え判断する際の指針となる判断基準をいかに設定するかが肝心になる。そこで、本部会では、道徳科の存立基盤と判断基準を示す哲学を多角的に追究し、それに基づいて子どもたちの道徳的判断力をいかに育成するかについて報告をし合い、協働的な議論に繋げたい。

【報告記録】

寺崎賢一（報告者）

カントの定言命法の発見で、人類の「道徳論」を定言命法と仮言命法に分けることが可能となった。定言命法はいわば「地動説」、多くの人が信ずる仮言命法は「天動説」に当たる。天動説は天体の法則の説明が部分的には可能だが全体の整合性は説明できない。「あなた」の道徳教育（仮言命法）は半分だけ世の役に立ってはいるが、半分は害悪をもたらしていることに気づいているだろうか？

木野正一郎（報告者）

J.デューイは、人は「連続的に一貫した活動」を為す中で、目的や欲望、思慮深い反省をすると説く。R.ローティは、「他者の生の具体的な細部との想像上の同一化」を図ることで、他者の傷みに共感し、多様性に寛容になり、社会から残酷さを取り除こうとする社会連帯（リベラル・アイロニスト）の意識を持つと説く。いずれも、他者との対話を通じて多様な価値観に出会い、よりよい社会を形成しようとする中で、新しい価値（捉え直しを含む）を創造すると主張する。この立場によれば、「価値」は初めから存在するものではなく、問題解決を通じて調整・合意された叡智（真善美聖健富）となる。このような視点・観点に注力した教育がなされれば、道徳的判断力の深耕も期待できる。

大藏純子（報告者）

道徳的問題について，自分の考えを，仲間と議論する中で，道徳的判断力は育つ。そのための教材文や授業展開の工夫が大切になる。また，子どもの発言やワークシートの記述内容をコールバーグやハーバーマスの道徳性発達段階に照らし合わせることで，道徳性の育ちを確認しながら次の段階へ高めていくことができる。さらに，自分たちが考えた解決策は，リコーナの人格教育における第 4，第 5 の R【尊重（respect）と責任（responsibility）】に照らし合わせると適切か？という視点をもたせることで皆が幸せになれる社会の担い手を育成できると考える。

柳沼良太（報告者）

道徳科教育学の存立基盤を形成すると共に、道徳科授業で子どもたちが人生の諸問題を考え判断し議論するためにも、その指針となる哲学が必要となる。ただし、この点についてカントの認識論や観念論に基づく哲学とデューイのプラグマティズムや経験主義に基づく哲学では、そのアプローチが大きく異なる。そこで、双方の道徳的判断基準に深く関わる道徳的理想の意義および道徳行為の因果論に焦点を当てて検討した。

「議論の記録」

岡島佑樹（司会者）

カント哲学と、デューイをはじめとするプラグマティズムの哲学は、これまで対局的な立場にあると捉えられてきた。しかしながら、本ラウンドテーブルでの議論を通して、双方の間に共通点や接点を見出すことができた。すなわち、「形而上学と形而下学の区別と連関」に着目することで、カント哲学は必ずしも現実から乖離したものではなく、理想をいかに実践に結びつけるかについても重視していたことが分かる。この点において、実生活での問題解決を通して価値を創造するプラグマティズムとの接点を見出すことができる。相違点のみならず、共通点や接点にもスポットを当てたことに、本ラウンドテーブルの意義があり、道徳教育学の理論的基盤の構築にも寄与する成果であったと言えるのではないだろうか。

寺崎賢一（報告者）

発表への質疑では、「幸福がやはり一番大切である」というカント批判があった。カントは普遍的な道徳原理を必然性にそって推論した結果、「常に道徳性を発揮できるためには必然的に自分の幸福欲求をコントロールできるようにならなければならない」という結論に至った。この思考の過程を全く無視してカント批判をされても、困惑するしかなかった。

木野正一郎（報告者）

物にはそれぞれに個性があり、世の中に全く同じものは存在しない。事象の見方・考え方も同様に個々に違いがある。カントの定言命法はその納得解を定式化したものである。ゆえに、ある道徳的価値についても、その捉え方に個性があるので、他者と共に議論をしながら合意を形成していくことが必要であると考える。この合意形成の果てにウェルビーングの価値はつながっている。カントのいう形而下学においては、こうした実践的訓練をすることが重要であるという議論をラウンドテーブルの担当部では行った。

大藏純子（報告者）

リコーナが提唱する人格教育を理論的基盤とした道徳授業の開発・実践について提案した。人格教育では、道徳性の認知的、情意的、行動的な三つの側面を視野に入れ、コア・バリューについて、子どもたちの理解を深め、心情を豊かにし、それを実際の行動に導くことを大切にしている。議論を通して、リコーナの人格教育は、カントの理性を基盤とした普遍的な道徳原理と、デューイの現実の問題解決を通じで形成されるプラグマティズムの両面を併せ持つと共に、「正しい判断について考えさせる 9 つの質問」や「5 つの問題解決法」は、子どもたちの道徳的判断力を高める方法として有効であるという考えが交流された。

柳沼良太（報告者・企画者）

本部会では、道徳科教育学を理論的に構築する上で重要になる哲学を各自の専門分野から提案し、道徳的問題の判断基準となる哲学的根拠とも関連づけて熟議した。全体討議では、カントの観念論哲学とデューイ・ローティ・リコーナのプラグマティズム哲学との思想的対立を中心に議論が展開された。双方は理論的基盤も判断基準も異なるため、実際の道徳的問題への対応について具体的に検討した。リコーナが提案する道徳的理想やプラグマティストが掲げるリベラル・ユートピアでは、カント哲学との共通点もあることを確認した。

第 11 部会

中学校道徳科を充実させるために④～未来からの視点で今の道徳教育を問い直す～

企画者：佐々木篤史（弘前大学教育学部附属中学校）
司会者：佐々木篤史（弘前大学教育学部附属中学校）
報告者：鈴木賢一（弥富市立十四山東部小学校）
：星美由紀（郡山市立郡山第三中学校）
：大館昭彦（流山市立南部中学校）
：飯塚秀彦（長野大学）

【企画趣旨】

本ラウンドテーブルは「中学校道徳科を充実させるために」を共通テーマとする第 4 回目の開催となる。過去 3 回の実践的な議論の蓄積を踏まえ、今回は「現行学習指導要領という枠組み自体が、果たして未来社会においても有効だろうか」という視点で行う。AI との共生、持続可能性、社会の分断といった未来の様相を展望し、現在の道徳教育の目標、内容、方法、評価の全体を未来からの視点で批判的に検証する。現行指導要領の理念を尊重しつつも、未来社会で求められる資質・能力育成の観点から、中学校道徳科が果たしうる役割を改めて検討し、その充実につなげる視点や方向性を明らかにすることを目的とする。

【報告記録】

・鈴木 賢一 会員

小学校での情報モラルや現代的課題の指導充実が、中学校道徳科の充実に不可欠であると主張。特に、AI やロボットを題材とし「人間とは何か」を問う教材が、現行の小中学校教科書に著しく不足していると指摘した。小学生が既に家庭で AI アシスタントに触れている実態から、小学校段階での実践は十分可能であるとし、単なる生活経験の話し合いで終わらぬよう、発達段階を考慮した「道徳的価値の理解」を授業の土台に据える必要性を強調した。

・星 美由紀 会員

現行の中学校指導要領に不足する「選択・判断基準を鍛える」視点を、高校新科目「公共」との接続のためにも重視すべきだと提言。多様な考えに触れる「対話」の機会を授業者が保障すること、そして生徒が安心して意見を表明できる「チーム」としての学級経営（コレクティブ・エフィカシーの醸成）が、判断基準を磨く上で不可欠であると述べた。また、議論は必ずしも明確な結論に落とし込む必要はなく、「モヤモヤしたまま考え続ける」ことの価値も問いかけた。

・大舘 昭彦 会員

現行指導要領が求める道徳科の「質的転換」は、多くの学校で未だ道半ばであると学校経営の視点から報告。働き方改革の中での研修時間確保の難しさ、生徒の心の多様化や人間関係スキルの希薄化、教員の経験不足といった複合的な要因が質的転換を阻んでいると指摘した。対策として、会議を減らして月 1 回の「全職員道徳研修日」を設け、強制的に研修機会を作るなど、経営上の具体的な工夫と努力について共有した。

・飯塚 秀彦 会員

AI との共生が現実となる未来を見据え、道徳科の目標「人間としての生き方」の意味を問い直す必要性を訴えた。AI には感情や主観的経験がなく、人を殺傷することに躊躇しない兵器にもなりうる一方で、人間は葛藤や経験を通じて道徳性を形成すると対比。道徳科の

授業では、観念的な理解に留まらず、体験と概念を結びつける「実感の伴った理解」を促すことが極めて重要だと強調し、中学2・3年生では内容項目に縛られない柔軟なカリキュラム編成も提案した。

【議論の記録】

本ラウンドテーブルは、4名の報告者がそれぞれ「発表・質疑・議論」を一つのセッションとして行うオムニバス形式で進めた。各セッションは独立しつつも相互に関連し、未来の道徳教育が探究すべき核心的な問いを徐々に精緻化していくプロセスとなった。

・セッション1：鈴木会員の報告を受けて—未来を生きるための「教材」を問う

最初の議論は、鈴木会員が提起した教材の不足という課題に対し、なぜそうした現代的な課題が教科書に反映されにくいのか、という構造的な問題へと展開した。単に「AI の教材を増やすべき」という意見に留まらず、検定教科書の限界や、教員が自ら教材を開発する際の時間的制約といった、より実践的な課題が共有され、未来に向けた道徳教育の「内容・素材」に関する課題が多角的に明確化された。

・セッション2：星会員の報告を受けて—育成すべき「能力」への深化

続く星会員の報告後の議論では、先のセッションで出た「道徳的価値の理解」と「選択・判断基準を鍛える」ことの関係性が主要な論点となった。「価値の理解」は「判断基準を鍛える」ための前提条件なのか、あるいは「対話」を通じて同時に育まれるものなのか、といった問いが参加者から出され、議論は「何を教えるか」から「能力がいかに育まれるか」というプロセス論へと深化した。ここで、鈴木会員のセッションで提起された「内容」の問題が、具体的な「能力」そして「方法」の問題へと接続された。

・セッション3：大舘会員の報告を受けて—理念を実現するための「学校体制」という課題

大舘会員の報告が示した学校現場の困難な現状を受け、議論は、これまでのセッションで語られた理念をいかにして実現するかという方法論に焦点が移った。特に、星会員の議論で理想とされた「チームとしての学校」の実現には、まず教員集団が学び合うチームになる必要があるという意見が出され、議論は個々の授業実践から学校全体の組織論へと移行。従来のトップダウン型研修ではない、若手の特性を活かしたボトムアップ型の研修モデルの有効性が提案されるなど、理念を実現するための「システム」という視点が加わった。

・セッション4と総括：飯塚会員の報告を受けて—3つの問いの統合と展望

最終報告者である飯塚会員の報告は、これまでの議論を統合し、より根源的な問いへと深める役割を果たした。特に、飯塚会員が提示した生成AIとの対話は、AIが「主観的な経験」を持たないことを具体的に示し、議論を活性化させた。セッション2で論じられた「判断基準」には、飯塚会員が強調した「実感の伴った理解」が不可欠である点が改めて確認された。さらに、セッション1で提起された「人間とは何か」という問いと、セッション3の「教員の多忙化」という現実が結びつけられ、教員自身がこうした根源的な問いと向き合う時間的・精神的余裕なくして、道徳教育の質的転換はあり得ないという構造的な課題が浮き彫りになった。

・総括

個別議論を踏まえた全体討論を通して、当初は個別のテーマであった「①探究すべき内容（人間性）」「②育成すべき能力（判断基準）」「③それを支えるシステム（学校体制）」が、未来の道徳教育を構想する上で不可分の要素であることが明らかになった。AI 時代という未来からの視点で、これら3つの側面から統合的にアプローチすることこそが、中学校道徳科の質的転換を実現する有効な道筋の一つであることが、本ラウンドテーブルの結論として導き出された。